



20年余の歳月を経て復活。再「開通」を祝い、地元住民や関係者らで記念撮影（4月8日）

お疲れ様でした。

28日の記念ウォーキングの参加者の皆さん。今も篠ノ井線とかかわり、このイベントの参加者のひとりでもある明科駅長。そして、「ケヤキの道」設立に深く携わった地元のお二人に話を聞きました。



山崎 泰志^{やすし}さん（豊科高家）
山崎 裕子^{ひろこ}さん（豊科高家）

「豊科周辺とはまた違う雰囲気。安曇野は広いと実感しました」と裕子さん。「多くの人が行き交った時代を想像しながら歩きました」と泰志さん。



鈴木 直樹^{なつき}さん（東京都世田谷区）

長期出張で松本市に滞在中の鈴木さん。「信州のことをもっと知りたいと思い参加しました。トンネルがしっかりと残っていることが良かったです」。



水谷 建春^{けんしゅん}さん（北安曇郡池田町）

水谷さんは以前からこの廃線敷に興味を持っていたとのこと。「文化遺産が多く、変化があって6*の道のりを感じませんでした。ケヤキが紅葉を迎える秋に再び開催してほしいです」。



山岸 千夜子^{ちやこ}さん（明科中川手）
横内 寿子^{としこ}さん（明科中川手）

お二人は地元から参加。「西条から高校3年間、この路線で通学しました。景色は昔と変わりません。あのころがよみがえったようです」と山岸さん。「全コースを初めて歩き、地元を見直しました」と横内さん。

「これまで廃線敷の整備を続けるなかで、苦勞やうれしかった瞬間を教えてください。」
宝 うれしかったのは、地域と市、関係団体が「溶け合った」瞬間です。昨年は整備が一気に加速しました。何かを始めようと思えば当然、それぞれ考え方も違います。それでも皆がそれぞれの立場で一緒になった瞬間は本当にうれしかったです。

小林 この手の取り組みは、行政

だけでは無理でしょうし、地域の力だけでも力不足だと思います。これからも、それぞれ理解し合いながら、一緒に進められればと思います。

「お二人とも次世代につなぐことへの思いが強いようです。」

宝 今は何かとせわしく、心が病んでしまう人も多い時代といわれます。時がゆっくりと流れるようなこの場所で、半日だけでも過ごしてもらい、心を休めていただければ。また、地域の歴史が見られる場所として、子どもたちの学習の場としても価値があると思います。

小林 先人が半世紀かけて育てたケヤキをそれ以上のものにして次世代に引き継ぎたいという思いを持っていきます。子どもと一緒に来てゆっくりしてもらおうなど、市民の皆さんに「木」から「気」を養っていただけだと思います。そして、この活動は、災害防止や不法投棄防止が出发点。地元地域の皆さんとともに、少しずつ、地道に活動をしていきたいです。（6月28日取材）

(写真左)「ケヤキの道」会長

小林 忠孝^{ただたか}さん（明科東川手）

(写真右) 明科・潮沢区長

宝 喜吉^{たから きよし}さん（明科東川手）

再び、人の行き交う場として

「篠ノ井線旧線の思い出は？」

駅長 私は長い期間、長野市にある指令室で、列車運行の指令業務を担当していました。この場所は傾斜のきつい難所でしたが、当時の運転手の技術力を実感できる場所でもありました。

「この廃線敷コースの魅力は？」

駅長 今回のウォーキングに参加しましたが、コースには架線柱や橋梁など、明治の鉄道の雰囲気を残し、細部にも見どころがあります。積み上げられたレンガ一つひとつに歴史が感じられます。また、地元住民の皆さんの力やあたたかな笑顔にも心打たれました。

「今後の抱負は？」

駅長 人と人をつなぐのが鉄道の役割であるように、私もさまざまな皆さんの橋渡しができればと思います。また、鉄道を通じて、安曇野全域のさまざまな魅力を多くの皆さんに知っていただきたいですね。（6月29日取材）

JR明科駅

もとひさ 太田 元久 駅長